広報 豊島区
としま
特別号
令和３年
12月15日

「第71回“社会を明るくする運動”」特別号の構成
１面…作文コンテスト表彰式
２・３・４面…作文コンテスト受賞作品

ＳＤＧｓ未来都市としま
TOSHIMA International City of Arts & Culture
SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
豊島区は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。

“社会を明るくする運動”

～犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ～

11月14日（日）作文コンテスト表彰式を開催しました！

作文コンテスト表彰式（小学生の部）

作文コンテスト表彰式（中学生の部）

《“社会を明るくする運動”とは》

すべての国民が犯罪や非行の防止と罪を犯した人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪や非行のない安全・安心な地域社会を築こうとする全国的な運動です。

《行動目標（この運動が目指すこと）》

① 犯罪や非行を防止し、安全で安心して暮らすことのできる明るい地域社会を築くこと
② 犯罪や非行をした人が再び犯罪や非行をしないように、その立ち直りを支えること

“社会を明るくする運動”豊島区推進委員会（50音順）

警視庁（巣鴨署・池袋署・目白署・巣鴨少年センター）、東京商工会議所豊島支部、東京都薬物乱用防止推進豊島地区協議会、豊島区、豊島区環境衛生協会、豊島区教育委員会、豊島区更生保護女性会、豊島区商店街連合会、豊島区青少年育成委員会連合会、豊島区町会連合会、豊島区BBS会、豊島区保護観察協会、豊島区保護司会、豊島区民生委員・児童委員協議会、豊島区立小学校PTA連合会、豊島区立中学校PTA連合会

“社会を明るくする運動”豊島区推進委員会では、例年7月の強調月間に、中央大会「区民のつどい」を開催するほか、地区大会として区内12地区の青少年育成委員会を中心に各団体の協力のもと、様々な趣向を凝らしたPR活動を実施しています。
今年は、新型コロナウィルスの影響で多くの行事・催しが中止となりましたが、「いのち」「社会を明るくする運動」をテーマに募集した作文コンテストには、豊島区立の小中学校の児童・生徒の皆さんから沢山の応募をいただきました。応募作品の中から、優秀作品を紹介します。

発行：豊島区　編集：子ども家庭部子ども若者課　〒171-8422 豊島区南池袋2-45-1　☎3981-1111　ホームページ http://www.city.toshima.lg.jp/　令和３年（2021年）12月15日発行

受賞作品 作文コンテスト

小学生の部

1,747作品

推進委員長賞

言葉と思い

豊成小学校 6年生　長崎（ながさき） 大嘉（たいが）さん

小学校に入学してすぐのことです。友達からいやな言葉を言われ、カッとなってしまい、思わず手が出てしまったことがありました。その場で担任の先生に注意され、友達にもあやまって許してもらいました。ぼくはなみだが出て止まりませんでした。

なみだの理由は二つありました。一つは、友達をたたいて痛い思いをさせてしまい、もうしわけなかったから。もう一つは、なんでぼくはその場ですぐ言い返すことができないんだろうと、くやしさを感じたから。

学校までむかえに来てくれたお母さんにもおこられました。大嘉はなんでいつも手を出すの。大嘉はなんでいつも言い返さないの。大嘉はなんでいつも……。

「ぼくもこまってるんだ!」

ぼくがなんとか言葉にすると、お母さんはもう問いつめてきませんでした。

友達に何か言われたときに、ぼくも何か言いたいという気持ちは強くありました。いやな言葉を言われたときに言い返すだけではなく、「おはよう」と言われたら「おはよう」と言う、「これ貸して」と言われたら「いいよ」と言う、こんな簡単なことが、ぼくにはむずかしかったのです。

お母さんは、ぼくが言いたいことがあるのに言えなくて困っているという悩みを、真剣に受け止めてくれました。話し合った結果、ぼくは2学期から池袋小の「ことばときこえの教室」に通うことになりました。

週に1回2時間、豊成小にある自分のクラスをぬけて、ことばの教室に通わなくてはいけないことを、担任の先生がクラスのみんなに話してくれました。

「泳ぐのが上手になりたくてスイミングに通う子がいるように、長崎さんも言葉が上手になりたくてことばの教室に通います。授業中にいないことがあるけれども、みんなで応えんしましょう。」

先生のお話のおかげで、ぼくがことばの教室に通うことを悪く言ってくる友達はいませんでした。みんな応えんしてくれたのです。

その後、ぼくは「ことばときこえの教室」に2年間通いました。行きはお母さんが教室まで送ってくれて、帰りはおばあちゃんがむかえに来てくれました。ことばの教室の先生達はとても優しくていつも明るく声をかけてくれました。先生方が熱心に指導してくださったおかげで、ぼくは会話のやりとりがスムーズにできるようになったのです。

ぼくは、この経験から三つのことを学びました。自分のことを知ること、相手のことを思いやること、感謝の気持ちを持つことです。

人にはそれぞれ得意なことと苦手なことがあります。好きなこともきらいなこともあるし、簡単にできることもむずかしいこともあります。まずは、それを理解することが大切だと思います。

ぼくは言葉のやりとりが苦手で、感情的になってしまうところがありました。そんな自分がいやになり、ここからいなくなってしまいたいと思うこともありました。

しかし、そういう自分を知ることが、初めの一歩だと思うようになりました。ぼくは正義のヒーローのように強くて、人を助けられる完ぺきな人間になりたいという目標があります。でも、自分はまだまだ完ぺきな人間ではないのだと認めることも、大事なことだと思いました。

そして、自分がつらい経験をしたことから、同じようにつらい思いをしている人を思いやる心を持ちたいと思いました。相手の気持ちに寄りそって、自分の言葉や行動で傷つけないように、常に思いやりの心を思って接していきたいです。

さらに、ぼくがたくさんの人に声をかけてもらい、支えてもらったことから、感謝の気持ちを忘れないようにしたいと思いました。学校の先生やクラスの友達、家族に対して、常に感謝の気持ちを持ち、何かしてもらったときに「ありがとう」をきちんと言えるようになりたいです。

今、世の中は新型コロナウイルスの流行によって、大変な日々が続いています。テレビのニュースを毎日見ていて、ゆううつになることもありますが、一人一人が自分と向き合い、相手を思いやり、周りの人に感謝の気持ちを持っていれば、社会が明るくなっていくと、ぼくは信じています。

常任委員長賞

「よりそい合ってできること」

仰高小学校 6年生　渡邉（わたなべ） 櫂（かい）さん

「社会を明るくする運動」としてどんなことができるか、ぼくなりに考えてみた。ぼくが住んでいる社会は、明るいものだろうか。一人一人にとって明るく住みやすい社会にするために、どんなことができるだろうか。

新型コロナウイルスが世界で流行し始めてから、気づけば1年以上がたっていた。去年の今ごろは、まだ学校が休校になっていて、ぼくは毎日、退屈な日々を過ごしていた。マスクやトイレットペーパーなど、ぼくが当たり前に身のまわりにあると思っていたものは、店頭から姿を消した。両親はパソコンを使って家でリモートワークをしている。ぼくは実際に友達に会うことは、めったになくなってしまった。担任の先生や校長先生にも会えなくなったし、授業もない。以前なら、朝学校に行けば、正門で校長先生が立っていて、「おはよう。今日も元気そうだな。」などと声をかけてくれていたのに、なんというかメリハリがなくて、張り合いがない感じがした。友達、学校、先生、授業･･･これらは、ぼくの生活の大部分で、毎日当然にぼくの身のまわりにあったものだ。マスクやトイレットペーパーなどの生活用品だけじゃない。こういうものがなくなって、ぼくは、そわそわ落ち着かない気持ちだった。

学校からは、勉強が遅れないように、プリントの宿題がたくさん出た。全部ちゃんとやるのはなかなか大変だ。理科では、雲の様子を観察して写真にとって比べたりした。でも、一人で勉強するのはなんとなくつまらなかった。いい答えを思いついても、それを聞いてくれる人はいなくて、つい、「こういう時、あいつなら何て言うかな」「先生ならどういう教え方をするのだろう」と考えてしまう。

くだらないことでケンカしたり、中休みはどういうチームでドッジをするか、ワイワイしながら決めることもできない。やっていることが一方通行な感じなのだ。

ぼくたちが住む社会は、顔を見て、お互いの目を見て、笑顔を見せあって、言葉をかけ合って成り立っているものなんだと、このとき初めて実感したのだった。もちろん、クロームブックやタブレットでなんとか学習をつなげることはできる。なんとか自分の言いたいことを伝えることはできる。ないよりは百倍いい。

でも、相手のうれしそうな表情は、ぼくの心を一しゅんで、ぱっと明るくしてくれる。悔しいときや悲しいときに流す涙は、言葉以上のものを伝えてくれる。

直接かけ合う言葉も大切だ。「ありがとう」「ごめんなさい」の言葉や、朝の気持ちの良いあいさつ、ご飯を食べるときの「いただきます」は、相手に対する感謝やおわびの気持ちを伝えることができる。

そういう周りの人との直接のやりとりが、ぼくの心を明るくしてくれるのだ。だからぼくは、直接会って顔を合わせて話し合ったりすることが、リモートよりも大切なものを生み出してくれると思う。

ぼくの住んでいる社会でも、声をかけ合って、笑顔を増やしたら、一人一人の心が通じ合って、ずいぶん住みやすいものになるだろう。

そういう明るい社会の実現をぼくは目指していきたい。

優秀賞

今の自分にできる事

高松小学校　6年生　藤間（とうま） 浬杏（りあん）さん

残念ながらいじめはこれからもなくなる事がないと思う。なぜなら、この広い世界の中でも人種差別・ヘイトクライム（人種・宗教などに対する差別意識を動機とする犯罪の事）の悲しいニュースを、毎日目にするからだ。国籍や肌の色の違いによる差別、言葉の違いによる差別、病気を抱えている事による差別、見た目の差別。挙げればいくらでも出てくる。そしてどれも身近だ。

大人も子供も、いわゆる普通と違う人や自分と違った人を受け入れられずにいじめが起きている。でも、もしも他の人達が全部自分と同じ考え方や才能を持っていたとしたら?私と同じリズム感を持っている人だらけだったら、この世界には音楽という文化はなかったのではないか。私と同じ絵のセンスだけしかなかったら、ゴッホは確実にこの世に存在していなかったし、スポーツに関してはもう、考えたくもない。人は何かしら他人とは違った特徴を持っている。だからこそ、この世界は楽しい事にあふれているし、毎日が新しいのではないか。

私と違う才能を持った人達は、歌詞に思いを込めて、有名スポーツ選手はテレビで発言して、いじめの痛みを人々に発信できるけど、私の立場ではいったい何が出来るのか?きっとこれだと思う。一人一人の人に興味を持って、その人の事を知ろうとする事。

私の小学校では毎年クラス替えがある。1年かけて仲良くなった友達と離れて、ほとんど話した事のない人と同じクラスになった4月は本当にどうしようかと毎回思っている。人見知りの私は、話しかけられるのを待ってみたり、恐る恐る話しかけてみたり、人の会話に紛れ込んでみたり、あの手この手で相手との距離を縮めてみる。すると、目立たないのに面白い人・算数が特別得意な人・絵がマンガ家みたいに上手い人・みんな知れば知るほど個性的で、誰にも真似できないものを持っている人ばかりで、私もそうなりたいといつも思う。そんな周りの人達をいじめたいと思うわけないし、その人達がいじめに巻き込まれて辛い思いをして欲しくないと、心の底から思う。それから、いじめようと思ってなくても、無意識にこの大切な人達が傷つく言葉を言ったり、行動したりしないように気を付けたいと思う。

それぞれが一人一人の人間を知り、価値をある大切な一人として尊重し合って、いじめが少しでも減っていけばいいなと思う。

だって、いじめがいけない事だという事は、ご飯を食べないと生きていけないのと同じくらい当たり前な事なんだから。ご飯を食べる事が関係ない人間なんていないはず。自分に関係ない事だと思わずに、みんな誰もが当たり前に幸せな人生を送れるような世界になってほしい。

マザー・テレサがこんな言葉を残している。

「小さな事でも、大きな愛を込めてやる事なら出来る。」

大それた事は出来ないけれど、周りにいる人達を思いやるという小さな事から、私は始めていきたい。

中学生の部

526作品

推進委員長賞

今、私たちにできること

巣鴨北中学校　1年生　千葉（ちば） 小春（こはる）さん

今年は新型コロナウイルスが世界中で猛威をふるい、世界が大きく変わってしまった1年でした。日本でも緊急事態宣言が数回にわたって発令されたことなどによって自由な外出や旅行をすることが難しくなりました。そんな今の状況下でこそ「社会が明るくなるようにはたらきかけること」が大切になってくると私は考えます。「社会を明るく」という大きな目標の中で私ができることは何だろうと考えてみた結果、「当たり前ではなくなってしまった当たり前を取り戻す」ということだと考えました。コロナ以前は毎日が明るく楽しく、パラエティーに富んでいました。しかし、マスクを付けているため人間にとって大切なコミュニケーション手段の一つである「表情」の読み取りが難しくなりました。小学校でのイベントも次々と縮小され、6年生最後の給食も全員前を向いて一言も話すことなく終えました。卒業するから友達とたくさん出かけて楽しもうと心待ちにしていたにも関わらずそれも叶わぬ夢となりました。中学生になったらたくさんの友達と仲良くなって、学校のイベントも楽しんで中学校生活を満喫しようと考えていました。しかし、待っていたのは6年生の時と変わらず前を向いて食べる味気ない給食、意見交流の少ない授業、新しくできた友達と遊びに行くことができない寂しさでした。その中で、「当たり前」だった「人との関わり」をどうにかして取り戻すことはできないかと考えました。考えていると、以前ニュースでごみ回収の業者さんが感謝を伝える手紙をもらったことを紹介していたことを思い出しました。そこで私は「人との関わりを取り戻す」ためには「感謝」と「コミュニケーション」が必要だと思いました。今まで当たり前だと思っていたもの、何も気にせず日常の中に溶け込んでいたものが当たり前ではないと気付きました。例えば、朝起きて母が朝ご飯をつくってくれていること、制服を着る時にアイロンがかけられていること、学校に行く時にいつも一緒に行ってくれる友達がいること、通学の時に「おはよう」と声をかけてくれる交通指導員さんがいること、私と仲良くしてくれる友達がいること、毎日分かりやすく勉強を教えてくれる先生がいること。これらのことも全て日常に溶け込んでいてなかなかそのありがたみに気付くことができません。しかし、今こうして考えてみると全て当たり前なことではなく、私に関わってくれる人それぞれが私を想っていることだと思いました。コロナウイルスが蔓延して、日常が日常でなくなった今だからこそ私たちが過ごしていた「日常」がどれだけの人に支えられていたのか、多くの人に支えられている「日常」を毎日過ごせているということがどれだけ恵まれているのかを感じることができました。そう思った今だからこそ、私に関わっている人に「感謝」を届けることが大切なのではないかと思います。「いつもありがとう」と一言声をかけるだけでも人の心はとても温かくなります。例えばいつも朝ご飯をつくってくれる母に「いつも朝ご飯をつくってくれてありがとう」と伝えてみたり、「今日は手伝うよ」と言ってみたり、学校の先生に「手伝うことはありますか?」などと聞いてみたり、友達に「一緒に音楽教室に行かない?」や「今日の授業のここ面白かったよね」などと話しかけたりして、日頃の感謝の気持ちを伝え、恩返しをしていこうと思いました。一つ一つの温かな言葉・行動を積み重ねて非力ながらも私に関わっている人の心を明るくできる運動を行っていきたいです。

常任委員長賞

声かけの大切さ

千登世橋中学校 2年生　青木（あおき） 一晃（かずあき）さん

「知らない人に声をかけられても、相手にしない。そして、決してついていかない。もし声をかけられたなら、学校や親に報告しましょう。」

ぼくが小学校に入学したてのころ、全校集会で、校長先生がこう言いました。その時ぼくは、なぜ声をかけられただけで報告しなければいけないのか、分かりませんでした。そこで父に聞いてみると、

「名前とか住所とかの個人情報を知らない人に教えることによって、その子が犯罪に巻きこまれてしまうかもしれないからだよ。」

と、教えてくれました。

ぼくが住んでいる豊島区には、「としま学校安全安心メール」というものがあります。これは、豊島区内での不しん者情報などを伝えてくれる便利な仕組みで、実際、不しん者に関するメールは、ひんぱんに届きます。その内容は、「写真をとられた」というものや、「あとをつけられた」というもの、そしてこれが一番多いのですが、「知らない人に声をかけられた」というものです。そして、声かけの内容には、「もうおそいから家に帰りなさい。」や、「どこの学校の子?」など、それが不しん者情報なのかと思うものもあります。

ある日、父がとしま学校安全安心メールを見ながら、こうつぶやいていました。

「こんなんで不しん者あつかいされるのか。これじゃあ注意もできないなあ。」

実はぼくも、小学生だったころ、知らない人に声をかけられたことがあります。学校の帰り道、つえをついたおばあさんが、

「交番はどこ?」

と、聞いてきました。学校で言われていたことを守るのなら完全に無視すべきですが、ぼくは立ち止まって、交番までの道を教えてあげました。なぜなら、あやしい人には見えなかったし、本当に困っているように見えたからです。道を教えてあげたら、そのおばあさんは、

「ありがとう。」

と言ってくれました。

このように、声をかけてくる人が必ずしも悪い人とは限らないのです。もしかしたらこのおばあさんのように、本当に困っているのかもしれません。それを無視して学校や親に報告しろとは、一体どういうことでしょう。

ぼくはこう考えます。当時、ぼくは高学年で、良い人と悪い人の区別も少しはできました。しかし、低学年の子にとっては、難しいかもしれない。それなら、声をかけてくる人を無視するという教えにもなっとくできます。

一方、声かけによって犯罪がくい止められることもあります。例えば、ふりこめさぎです。お年寄りが、コンビニで高額のギフト券を買おうとしているのを店員が不しんに思い、声をかけて、そのお年寄りが犯罪のひ害にあうのを防いだのです。また、けいたい電話で話しながら、慣れない手つきで銀行のATMを操作しているお年寄りに声をかけ、そのお年寄りが犯罪のひ害にあうのを防いだ銀行員の話もあります。このように、声かけ自体が悪いわけではないのです。

ぼくの街には防犯カメラがたくさんあり、それが人の目の代わりになっています。それはそれで安心できますが、住んでいる人が他人に無関心で、声かけのない社会が本当に安全で明るい社会かというと、ぼくはそうは思いません。やはり、困った人がいれば声をかけ、みんなで協力して助け合える社会がいいなと思います。

「知らない人に声をかけられても無視するように。」と言われ、知らない人と関わらないようにして育ったぼく達の世代が、先程のコンビニ店員や銀行員のような行動をとれるでしょうか。声かけイコール悪という考えが染みついたぼく達が、そんな行動をとれるでしょうか。いや、多分できません。

困っている人を見たら積極的に声をかけられる大人になるためには、声かけの大切さを理解し、それを実せんするということが大切だと、ぼくは思います。ぼくはそういう大人になるために、これからは、困っている人を見かけたら、積極的に声をかけていこうと思います。

優秀賞

「一足の靴が命を救う」

池袋中学校　3年生　中丸（なかまる） 玖怜亜（くれあ）さん

子供の頃からよく行っている百貨店の靴売り場に、緑の箱が設置されていることに気づきました。その緑の箱は、アフリカの子供達に靴を寄付するための箱だと知り、はかなくなった靴を寄付することにしました。

何回か寄付しているうちに、靴の行方に疑問をもち、調べることにしました。すると、アフリカの子供達の命を救うことに繋がっていると知りました。アフリカには、靴を入手できず、はくことができない子供達が多くいます。靴をはかずに整備されていない道を歩くと、足の小さな傷から寄生虫や菌が入り、破傷風などの感染症を患い、命を落としてしまうことがあります。また、足を切断してしまうこともあります。このように、靴をはけずに生活している多くの子供達が命を失っています。

そんな子供達を救うために私にできることは何だろうと考えました。それは、引き続き寄付することです。私はある日、こんな記事を読んだことがあります。アフリカに靴を運んだ日本人が現地の子供達一人一人にサイズの合った靴をはかせると、みんなはいた瞬間から笑顔になって校庭や学校の周囲をくるくると走り回ったという記事です。靴をはくことが当たり前である私達には想像もつかないことでしょう。

一方で日本では、約8割の人がはけるけれどサイズが合わなくなった靴や、はけるけれどデザインが古くなった靴等を廃棄処分しているのです。これらの靴がアフリカの子供達の手元に届けば、より多くの命を救うことができるでしょう。

他にも私達にできることがあります。一つ目は、現状を知り、興味・関心をもち、発信していくことです。二つ目は、フェアトレードの商品を買うことです。フェアトレードとは、発展途上国の原料や製品を適正な価格で継続的に購入することであり、それによって、発展途上国の人々の収入が安定することです。家庭の収入が安定することで、子供が家計を支えるために働かずに済みます。すると、労働の時間を、教育を受けるための時間にまわすことができ、自分達の命を守るための知識を得ることができます。例えば、衛生問題について学ぶ人がいれば、その国の医療や衛生管理が充実し、多くの人の命を救うことに繋がるでしょう。

命とはかけがえのないものです。命の大切さというのはみんな平等であるべきだと思います。私よりも年下の子供達が、今の日本では当たり前の靴をはくことができなかったことによって、命を失うことがあると知り、とてもショックを受けたと同時に、知れて良かったとも思いました。これからも世界で起きている命についての問題に注目していきたいと思います。

私一人が靴を寄付するという行為は、非常に小さなものであっても、支流が集まり、やがて大きな川となるように、同じ思いをもった人が多く集まれば、やがて大きな力になると思います。その輪が広がることで、これらの行為が当たり前の社会となり、興味・関心をもち続け、行動に移すことが何よりも重要だと私は考えます。

小さな心がけから

優秀賞

富士見台小学校 6年生 佐藤（さとう） 和花（わか）さん

私は最近、人との関わりが減ってきていると思います。毎日学校で友達に会ってはいますが、近所の人にはあまり会っていません。「人と関わる必要なんてない」と思う人もいるかもしれません。人と関わらなくても生きることはできるからです。しかし、近所や地域の人と関わり、信頼関係を築いておくことは大切なことです。

2011年3月11日、東日本大震災が起こりました。東北地方を津波がおそい、多くの人が亡くなりました。東京でも、電気やガスがとまるほど、被害はとても大きかったです。岩手県や宮城県などでは、津波から逃れるために多くの人が高台の避難所に避難しました。東京に住んでいる私は、テレビで避難所の様子を見ました。やっとの思いで津波から避難した人たちは、家族や友達など、大切な人や、家といった生きていくために必要なものを失いました。避難所生活でストレスがたまり、自殺をした人も少なくありません。そんな中、地域と助け合い、命拾いした人がいます。一人暮らしをしている高齢者が一人で避難できずにいるとき、地域の知り合いが助けてくれたそうです。避難所の苦しい生活も、地域の人がいたため、孤独になりませんでした。

しかし、今の東京はどうでしょうか。私はマンションに住んでいますが、同じマンションに知らない人がたくさんいます。登下校中にすれ違う人も、顔も名前も知りません。これでは、災害が起こったときに助け合うことができません。

そこで私は、少しでもマンションの人と関わろうと思い、会ったときにあいさつをすることにしました。最初は緊張してしまい、声が小さくなってしまったため、返事をしてくれない人がいました。私は返事をしてくれないと意味がないと思い、大きな声であいさつするように心がけました。すると、ほとんどの人が返事をしてくれるようになりました。そのため、私は気持ちが良くなり、さらに積極的にあいさつができるようになりました。マンションのほとんどの人とあいさつをしたため、顔と声を覚えることができました。

あいさつをするようになり、今まで知らなかった人が優しく接してくれたため、私はマンションの住民として認められた気がしました。そして、東日本大震災のときのように、大きな災害が起こったときに助け合うことができると思います。大きな声で明るくあいさつをすると、その分、災害のときに頼りにされるようになります。

「人と関わる」と聞くと、難しく感じます。どのようなことをすれば人と関われるのか、どのように関われば良いのかなど疑問が生まれ、めんどうになり、あまり関わらなくなってしまうのです。しかし、人と関わるために大きなことをする必要はありません。あいさつといった小さなことを心がけ、実行することで、人との関わりが広がります。だから、自分にできることを見つけ、実行したいです。

「大好きな私の住む町を守るために」

優秀賞

高松小学校 6年生 島原（しまはら） 悠颯（ゆう）さん

私が住んでいる池袋で起きているニュースをよく聞きます。私も実際道にパトカーが何台も止まっているのを見ることがあります。そんな悪いイメージのある池袋ですが住んでいる町の人たちは犯罪や事件のない明るく楽しい池袋にするためにたくさんの地域活動を大事にしています。

私は小さいときから近所でやっているお祭りに参加しています。おみこしをかついで池袋の駅前をパレードしたり町内をねり歩きしています。その中でも楽しみなのは町内のお母さんが作ってくれるカレーライスです。みんなでいっしょにカレーライスを食べることで知らない人とも仲良くなれたり近所のおじさんやおばさんとも学校でのできごとなどを話せることが私はとても楽しみです。また夕方に行うえん日も楽しみで私は2年生のころからスーパーボールすくいの手伝いをしています。最初はただ楽しそうでみんなにくばるのをやりたかっただけですがやっているうちにスーパーボールすくいをたんとうしている私のおじいちゃんも休けいができて楽になったし私も楽しくできました。おじいちゃんに「今日遊びに来てくれた子どもたちとても楽しそうだったね。」というとおじいちゃんは、「昔はお祭り以外にも地域の運動会やバス旅行もあったが、今はすっかりなくなってしまったけど地域の活動はとても大切だからお祭りのあとのえん日は続けているんだよ。」と教えてくれました。子どもがお家で一人になったり、一人暮らしのおとしよりが地域の人とコミュニケーションがとれることで町の犯罪が減なくなるそうです。その他にも近所の人と知り合いになることで朝「いってきます」とあいさつすることができます。

私は社会を明るくする運動について学校でならい初めて知りました。だけど、身近なところですでに行われていました。

大好きな池袋を守るためにこれから私にできること。

①地域の活動にひき続き参加することです。今は新型コロナウイルスによってふくろ祭りや七夕祭り、節分やおもちつきなど楽しい行事がお休みしています。ですがそれ以外でも私に出来ることはたくさんあります。

②大人の手伝いを進んで行う。

③ごみ拾いに参加する。

④家の前をそうじするときに少し前の道路もそうじする。

⑤家に花を植えて道を通る人の気持ちを明るくする。

⑥近所の人と大きな声で明るくあいさつをする。

⑦どんな人でも仲良く、助け合って生活する。

中でも私が一番進んで行い、他の人もいっしょに行ってほしいものは、⑦の「どんな人でも仲良く助け合って生活する。」です。学校でもこまっている人がいたら助けてあげたり1年生をお世話したりしています。

身近なところでかんたんに出来ることなのでどんどん行っていきたいです。池袋だけでなく東京都、日本とこの行いを広げていきます。

差別は遠い問題じゃない

優秀賞

千登世橋中学校 1年生 伊達（だて） 響子（きょうこ）さん

小学校5年生の時、差別があった。差別されたのは毎朝通学路を歩いている障害者の方。差別していたのは通学路を毎朝通る小学生、特に上級生だった。「差別はいけない、平等な社会を」と学校で何度も言われたのに。障害者の方だって、障害を持つことを選んで生まれたわけではないのに。みんな、一人の立派な人間なのに。差別を、この世からなくすことはできないのだろうか。

障害者の方は、毎朝ほぼ決まった時刻に通学路を歩いていた。時々大きな声を出す方で、私も急に大きな声を聞いてびっくりすることがあった。でもその方の少し前を歩いている上級生たちは笑いながら逃げるように走っていった。その行動を見た時、一番に「何これ」と思った。自分と違うところがある人に差別することに「何これ」。本来下級生の見本になるはずの上級生が差別しているという「何これ」。世の中がおかしいのかと思った。差別していた人たちに注意しようと思ったけれど、どことなく怖くて注意できなかった。その人たちは、次の日もその次の日も同じことをくり返していた。

差別をこの世からなくすこと。このことはすごく難しいが、できると思う。〝すごく難しい〟と私が思うのは本来人間は差別する生き物だと思うからだ。差別というより区別に近いかもしれない。例えば、「あなたの親友○○とあなたの性格の違いは何ですか?」と聞かれれば、ほとんどの人はすぐ答えられるだろう。人は、自分と誰かを比べて違いを見つける。そういう生き物だと思う。でも、同じ人間でも一人一人違うことを理解して良い方向につなげる人と、一人一人違うことを理解していない、あるいは理解しているが悪い方向につなげてしまう人がいる。「あなたはどちらの人とともに過ごしていきたいですか?」。私は絶対違いを理解して良い方向につなげていく人の方が良い。世の中のほとんどの人が、この良い方向につなげていく人になれば差別は減少する。差別される人にも救いの手が差しのべられる。そうなることで、一人一人が生き生きと明るく過ごせる社会へ歩みを進められる。

今、アメリカで人種差別が問題となっている。しかし、差別は遠い異国の問題ではない。日本にも、もっと身近なところでも起きている。新型コロナウイルスの流行で、差別がより深刻になるかもしれないと危惧されているらしい。まずは一人一人が自覚をもつこと。差別という誰かが苦しんでいる問題にしっかり向き合うこと。一人一人が違うということをしっかり受け止め、理解し、良い方向につなげられる人が増えれば、差別はきっと無くなる。私は、そう信じている。

社会を明るくするために

優秀賞

巣鴨北中学校 1年生 斎藤（さいとう） 恵衣（けい）さん

みなさん今、社会が明るいと思いますか。そして、「社会が明るい」とはどのようなことだと思いますか。僕は「社会が明るい」とは、どのようなことなのか、改めて考えました。「社会が明るい」とは、社会に笑顔が増えて、世界中の人が笑顔で楽しく生きていくことだと思いました。

けれど今、コロナウイルスで世界が大変なことになっています。そして、社会が明るいとは言えない苦しい状況です。そして、笑顔も減ってきて、マスクをしていて相手の笑顔や表情などが見られなくて、とても悲しいです。早く世界の人と話したり、旅行をしたり、マスクをとって会話できる日が一日でも早く来たらうれしいです。

そんな今、少しでも笑顔を増やすために、私達にできることはいくつかあります。

一つ目は、気持ちのよい「あいさつ」で、コミュニケーションをとることです。僕は、友達や先生方などに「おはようございます。」とあいさつを言われたり言ったりすると、とてもうれしいです。そして、自然と笑顔をつくることができます。さらに、自分からあいさつができると、とてもうれしい気持ちになります。マスクをしていても、あいさつをすることでコミュニケーションをとれるので、あいさつは大切なことだと思いました。

二つ目は、助け合うことだと思いました。僕は電車の中で、ある人がおばあさんに席をゆずっていたのを最近見ました。その時のおばあさんの顔に笑顔があふれ、すごくうれしそうでした。そして、見ている僕も心がスッキリして、周りが明るくなったような気がしました。僕はこの時、みんなで笑って生きていくには、助け合うことが大切だと感じました。僕も友達に助けてもらったことがあります。その時は、とてもうれしかったし、自然と「ありがとう」と言って、僕も友達も笑顔になりました。

三つ目は、町をきれいにすることです。

例えば、きたない机で勉強していても、頭に入ってこないと思います。それに比べ、きれいな机で勉強すると気持ちもよくて、頭に入りやすいと思います。勉強が終わると笑顔が出ます。それと同じで町をきれいにして、笑顔を増やしたらいいと思います。そのために今、5月30日はゴミゼロデーと言って、ゴミを拾い、町をきれいにする活動があります。僕は、小学生の頃にその活動に参加して、ゴミを拾いました。拾った後、町がきれいになってうれしかったです。そして、小学校では、町にポスターを掲示したりしてポイ捨てをしないように呼びかけました。町がきれいだととても気持ちもよく、笑顔が多くなって社会が明るくなるので、町をきれいにできるようにしたいです。

このように三つのことを行い、町をきれいにして、社会を明るくしたいです。そして今、コロナで世界が苦しく、明るくない状況ですが、旅行をしたりやマスクをはずして話したりできる日が来たら、社会が明るくなると思います。その日が来るまでに町をきれいにして、豊かな町にしていきたいです。

地区優良賞　受賞作品

地区優良賞は、応募者の中から、学校ごとに1名ずつ選出しています。

小学生の部

学校名	受賞者氏名	作品名
仰高小学校	青木　響大	「つながる」
駒込小学校	髙木　啓行	人とつながる明るい社会のために
巣鴨小学校	髙橋佳奈子	自然に生きる生き物の命
清和小学校	平田　涼	「スズメの声」
西巣鴨小学校	伊藤　亜希	また悲劇が起こらないように
豊成小学校	長﨑　大晴	命のとうとさ
朋有小学校	河田　美音	防ごう新型コロナウィルスの流行!
朝日小学校	松村　醍醐	ぼくのおばあちゃん
池袋本町小学校	掛井　萌結	助け合う社会
池袋第三小学校	石川　晏	この世で一番大切なものとは…
南池袋小学校	青山　世奈	私は命を救いたい
高南小学校	長野　令蒼	光りかがやく動物の命
目白小学校	仁王健太郎	少年犯罪をなくすために
長崎小学校	武井　智洋	だれもが不便を感じない社会
要小学校	綾　優月	思いやりのある社会
椎名町小学校	川口　英一	命を大切に思った理由
富士見台小学校	ミャッチャーピュゾー	考えるだけでも。
千早小学校	田﨑　あかり	よさを伝えて
高松小学校	石井美実花	「共存していく未来への道」
さくら小学校	五十嵐苺果	障害をもっている人たちの中で

中学生の部

学校名	受賞者氏名	作品名
駒込中学校	柴田　花	「差別を生まない社会へ」
巣鴨北中学校	尾崎　和磨	耳を傾けることの大切さ
西巣鴨中学校	土田さくら	小さなことから明るい社会に
池袋中学校	南塚　美保	「生きている私たちに何ができるだろう。
千登世橋中学校	脇本　詩音	私にできること